

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On Oral Emphasis, through the Observation of the Language of Tokyo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大石, 初太郎, ÔISI, Hatutarô メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001705

プロミネンスについて

—東京語の観察にもとづく覚え書—

大石 初太郎

1 プロミネンスとアクセント

—まえ高型とあと高型

1. プロミネンス，卓立強調あるいは対比強調の表現では，アクセントの型が明瞭に実現される，それが破壊されることはない，といわれる。また，それはプロミネンスが文中の特に注意の向けられている主要語をはっきりと聞きとらせるための発音法で，知的，指示的表現だからだと説明されている。

あれは国会討論会じゃなくてガ[↑]イトーロ[↑]クオンでしよう ソ[↑]レオ吉田さんが
いってるんだろ 数多くの[↑]オ[↑]ベラを作りました（プロミネンスの音調の昇降を
[↑] ↓ で示す。）

これらの例では，たしかにアクセントの型に従った高低変化するなわち音調がきわだたされている。これがプロミネンスの音調の代表的な型だとはいえるかもしれない。だが，プロミネンスの音調には，これと違ったものもありそうに思われる。

2. 次のような音調が実現されることは多い。やはりプロミネンスとみる。

シャ[↑]ジ[↑]ン[↑]キ[↑]ガ道楽 カ[↑]レ[↑]ラ[↑]ワそれがわからない ナ[↑]ケ[↑]レ[↑]バどうする
もうイ[↑]ッ[↑]シュ[↑]ーカ[↑]ンがまんしてください ト[↑]ー[↑]キュー[↑]ーカ[↑]イ[↑]カ[↑]ン[↑]ワみんな
知ってますね

語の発音にそれぞれ二つの山があるが，第一の山はアクセントの山で，これがあるかぎり，アクセントの型が保持されているということとはできる。しかしそれにしても，別に第二の山のあることは音調構造の上で注目されなければならない。しかも，この型，すなわち，中高型アクセントの語，頭高型アクセントの語の場合，アクセント核に後続する拍のうち（多くの場合その最後の拍）に高さを置く型は，プロミネンスの音調の型として大きな勢力をもっているよ

うに見受けられる。

また、次のような、二段丘とでもいいたいものがある。

オ¹ト¹ー¹ト¹ワおとなしい *山の雪がキ¹エ¹レ¹バ……(*印は作った例。他はすべて拾った例。) 少数のシ¹ホン¹カ¹ワ喜ぶだろう。

すなわち、平板型アクセントの語、尾高型アクセントの語の場合、語末に当る拍にプロミネンスの高さの置かれる型である。これも二山と同様、大きな勢力をもっている。なお、この際、平板型がくずれることも注目される。

二山と二段丘とは、アクセントの型の相違にもとづいてあらわれる別であるが、これを合わせて、プロミネンスの音調の「あと高型」とよんでみる。これに対して、アクセントの型に従って、プロミネンスの高さの実現されるものを「まえ高型」とよぶことにする。

また、シャ¹シ¹ン¹キ¹、カ¹レ¹ラ¹のような、いわば「まえあと高型」も認められるが、まえ高型・あと高型が基本のもので、まえあと高型は特別強調のために用いられる合成型だといえよう。

ところで、プロミネンスの高さがあるという認定は何によるか。(a) まえ高型では、アクセントの高の部分¹が特にきわだって高く²発せられていること。ガ¹イト¹ー¹ロ¹クオンは、強調のない発話におけるガ¹イト¹ー¹ロ¹クオンに比べて高まり方が著しい。(付図1) (b) 二段丘のあと高型では、アクセントの高の部分の末部¹が特に一段と高められていること。オ¹ト¹ー¹ト¹では、第4拍が第2、3拍より一段と高い。(付図2) (c) 二山のあと高型では、アクセントの低の部分の末部¹が高められていること。カ¹レ¹ラ¹は、カ¹レ¹ラ¹に比べて、第3拍が高められているという違いをもつ。(付図3)

したがって、まえ高型及び二段丘のあと高型では、プロミネンスの高さは特高となるが、二山のあと高型では必ずしも特高とならない。語の音調に変化を与え、語をきわだたせる目的は、それでも十分達せられるからである。

また、まえ高型とあと高型とを比べると、まえ高型では高低の幅が契機となり、あと高型では高低の変化が契機となる。そのため、まえ高型の場合は、特に後続の部分を低くして当の部分¹を浮きあがらせるようなやり方もしばしば用いられるように観察される。

3. デ^レシ^レネツ^レキ^レワあるのよ 独身のカ^カタ^タッテいう条件がつくんです キ^キナ^ナ
 コ^コ (黄な粉) ッテいったでしょう 故障がオ^オコ^コル^ルト困る

などもあと高型と見られるが、これらはそれぞれアクセントの型を破壊している
 と見なければならぬ。

これらはいずれも語末から2拍目にアクセント核のある語だが、語末に当る
 拍にプロミネンスの高さが置かれてアクセント核が失われることがあるのであ
 る。この場合もし、デ^レシ^レネツ^レキ^レ、カ^カタ^タ、キ^キナ^ナコ^コ、オ^オコ^コル^ルだと見る
 ことができるならば、これは一種の二山のあと高型で、アクセント核は保持さ
 れているといえるし、その方が説明には便宜だが、どうもそう見るのは実情に
 合わないように思う。事実は二段丘のあと高型をなして、アクセント核が失わ
 れていると見られる。

なお、ウ^ウシ^シワ (牛は) とウ^ウマ^マワ (馬は)、ム^ムスコ^{スコ}デ^デワ とム^ムスメ^{スメ}デ^デ
 ワとの相違がある、ここではプロミネンスによる高まりの直前の拍がアクセント
 核に当る場合は、そこに早わざの降昇Vがある (川上葵氏が指摘しておられる。
 ——「東京語の卓立強調の音調」国語研究、第6号) (付図4, 5) ということは、ア
 クセントの型が重きをなしていることの証拠で注目すべきだが、デ^レシ^レネツ^レ
 キ^レ、カ^カタ^タ、キ^キナ^ナコ^コ、オ^オコ^コル^ルの場合がこれと違うのは、語のつながりの
 間の現象と語内部の現象との相違なのであろうか。

結局、まえ高型のプロミネンスの音調はアクセントの型に従うが、あと高型
 のプロミネンスの音調は必ずしもアクセントの型に従わない場合がある。アク
 セント核が失われる場合もあり、また、アクセントの型による音調のほか、
 独自の高低変化を加える形をとる場合もある。

4. ゲ^ゲンポー^ンワ戦争放棄をうたっているんだ ゲ^ゲッッシュェー^ッワ3万円ほど レ^レ
 キ^キシ^シト^トワ申しませんが歴史的なデ^デニカ^ニニ関係があります ト^トーグノヨ^ヨト^ト
 (唐虞の世) よんでよく治まった世のダ^ダイメ^イーシ^シニ^ニサ^サニなりました

などにおいては、助詞にプロミネンスが置かれているのだが、これらにおいて
 は、プロミネンスとアクセントの型との関係はどうなっているだろうか。

助詞がそれぞれ自己の独立したアクセントをもつという見方 (服部四郎「文節
 とアクセント」民俗と方言 No. 3, 4 金田一春彦「日本語のアクセント」講座現代国語

学Ⅱ) に従えば、これらの場合は、そのアクセントの型に従ってプロミネンスの高さが実現されたもの、あるいは、 $\overline{\text{ケ}}|\overline{\text{ン}}\overline{\text{ポー}}|\overline{\text{ワ}}$ 、 $\overline{\text{ト}}|\overline{\text{ー}}\overline{\text{グ}}\overline{\text{ノ}}\overline{\text{ヨ}}|\overline{\text{ト}}$ 、 $\overline{\text{ダ}}|\overline{\text{イ}}\overline{\text{メ}}|\overline{\text{ー}}\overline{\text{シ}}\overline{\text{ニ}}|\overline{\text{サ}}|\overline{\text{エ}}$ のようなアクセントの型どおりの発音だとも見るができる。ところが、助詞のアクセントは先行する自立語との組合せできまるという見方に従って、 $\overline{\text{ケ}}|\overline{\text{ン}}\overline{\text{ポー}}|\overline{\text{ワ}}$ 、 $\overline{\text{ゲ}}|\overline{\text{ッ}}\overline{\text{シ}}\overline{\text{ュー}}|\overline{\text{ワ}}$ 、 $\overline{\text{レ}}|\overline{\text{キ}}\overline{\text{シ}}\overline{\text{ト}}|\overline{\text{ワ}}$ 、 $\overline{\text{ナ}}|\overline{\text{ニ}}\overline{\text{カ}}\overline{\text{ニ}}$ 、 $\overline{\text{ト}}|\overline{\text{ー}}\overline{\text{グ}}\overline{\text{ノ}}\overline{\text{ヨ}}|\overline{\text{ト}}$ 、 $\overline{\text{ダ}}|\overline{\text{イ}}\overline{\text{メ}}|\overline{\text{ー}}\overline{\text{シ}}\overline{\text{ニ}}\overline{\text{サ}}|\overline{\text{エ}}$ がそれぞれアクセントだと見るならば、上掲例は $\overline{\text{レ}}|\overline{\text{キ}}\overline{\text{シ}}|\overline{\text{ト}}|\overline{\text{ワ}}$ 、 $\overline{\text{ゲ}}|\overline{\text{ッ}}\overline{\text{シ}}\overline{\text{ュー}}|\overline{\text{ワ}}$ を除いて、すべてプロミネンスによって助詞のアクセントの型が破壊されているものと見られることになる。この見方によれば、 $\dots|\overline{\text{ガ}}$ 、 $\dots|\overline{\text{ワ}}$ 、 $\dots|\overline{\text{カ}}|\overline{\text{ラ}}$ のような独自のアクセントは考えられず、 $\dots|\overline{\text{ガ}}$ $\dots|\overline{\text{ワ}}$ 、 $\dots|\overline{\text{カ}}|\overline{\text{ラ}}$ のようなプロミネンスの音調だけが考えられることになる。

なおまた、

* $\overline{\text{ハ}}|\overline{\text{シ}}\overline{\text{メ}}|\overline{\text{カ}}|\overline{\text{ラ}}$ 調子がよくなかった—— $\overline{\text{ハ}}|\overline{\text{シ}}\overline{\text{メ}}|\overline{\text{カ}}|\overline{\text{ラ}}$ …… $\overline{\text{イ}}|\overline{\text{イ}}\overline{\text{タイ}}|\overline{\text{ダ}}|\overline{\text{ケ}}$ 言
てしまう——* $\overline{\text{イ}}|\overline{\text{イ}}\overline{\text{タイ}}|\overline{\text{ダ}}|\overline{\text{ケ}}$ …… * $\overline{\text{コ}}|\overline{\text{ゴ}}\overline{\text{ト}}|\overline{\text{バ}}|\overline{\text{カ}}|\overline{\text{リ}}$ 言っている—— $\overline{\text{コ}}|\overline{\text{ゴ}}\overline{\text{ト}}|\overline{\text{バ}}|\overline{\text{カ}}|\overline{\text{リ}}$ ——* $\overline{\text{コ}}|\overline{\text{ゴ}}\overline{\text{ト}}|\overline{\text{バ}}|\overline{\text{カ}}|\overline{\text{リ}}$ ……

などのような例について見ると、プロミネンスの音調が助詞においては自由に変化する傾きがある。ここにはどうしてもアクセントの型の破壊があると見なければならぬ。そして、これは、もともと助詞においては、アクセントが独立してあるにせよ、先行自立語との組合せによってきまるにせよ、その型の勢力が弱いからだと言ってよさそうに思う。このことは助動詞についても同様に言えるのではなからうか。とにかく、こうして、助詞・助動詞においては、プロミネンスはアクセントの型を侵すと言わなければならないようである。しかし、アクセントが文節にきまっているという見方を取れば、上掲例はすべて文節を単位としてプロミネンスの二山あるいは二段丘の $\overline{\text{あ}}\overline{\text{と}}$ 高型と見ることができる。

こういう返事を $\overline{\text{シ}}|\overline{\text{マ}}|\overline{\text{シ}}|\overline{\text{タ}}|\overline{\text{ガ}}$ 総理大臣を追究 $\overline{\text{シ}}|\overline{\text{マ}}|\overline{\text{シ}}|\overline{\text{タ}}|\overline{\text{ラ}}$ そんな金が
 $\overline{\text{ア}}|\overline{\text{ル}}|\overline{\text{ナ}}|\overline{\text{ラ}}$

などは助動詞にプロミネンスの加えられた例だが、これも文節を単位としてみれば $\overline{\text{あ}}\overline{\text{と}}$ 高型である。

5. $\overline{\text{ワ}}|\overline{\text{タ}}|\overline{\text{シ}}|\overline{\text{ワ}}$ そう思っています そういうバ $\overline{\text{ア}}|\overline{\text{イ}}|\overline{\text{モ}}$ ある

のような音調がある。第2拍上昇という東京語のアクセントの型(と一応よん

でおく)にもとづいていえば上昇が1拍あとへずれている。これをプロミネンスの「おそあがり」とよんでみる。しかも、アクセントはワ¹タシワ、バ¹アイモであるべきだから、…¹ジ、…¹イも腑におちない。やはりアクセントの型を破壊している現象である。これはこう解される。シの拍あるいはイの拍の高さを特にきわたらせるために、その直前のタの拍、アの拍が特に低められた。これが¹お¹そ¹あ¹が¹りの理由である。また、シの拍、イの拍の高さをきわたらせるために、その直後のワの拍、モの拍が低められた。これが平板型アクセントを侵した、ないしは後続する助詞のアクセントの型を侵した理由である。

それでは、シの拍あるいはイの拍の高さがきわたされるというのは何か。これはいうまでもなく、¹あと¹高型である。¹あと¹高型のいわば変種として¹お¹そ¹あ¹が¹りがあるものであり、¹お¹そ¹あ¹が¹りの¹あと¹高型では、高く付くはずの助詞が低く付くこともあるといえよう。

しかし、これは強度のプロミネンスの場合の型だといってい。ワタ¹シワ、バ¹アイモのような単純な¹お¹そ¹あ¹が¹りとしてプロミネンスの音調が実現されることもあり、それはワタ¹ジワ、バ¹アイモに比べて強調の度合いが弱いと感じられるからである。

6 いえ、¹スイカの皮ではありません 宮城県じゃなくて¹アキタ¹ケンだっ
たら

のような、低かるべき第1拍から高く出るプロミネンスの音調が、¹ま¹え¹高型の場合しばしばあらわれる。上昇が前にくりあがった形で、いわばプロミネンスの「早あがり」である。(東京式アクセントの第2拍上昇の型としての勢力の強さに、問題があるのではなからうか。早あがりの型の背景にそれがあのかもしれない。たとえば、ケ¹シポー¹イハン、ク¹ヤシマ¹ギレ、テ¹ツダ¹イなどの「¹」は、「¹」に比べて、一般のことばの使い手にとってとらえにくいのではなからうか。オ¹テ¹ガミ、ゴ¹ホ¹ービ、コ¹ザッパ¹リなどの合成的な語については、多少状況が違うようだが、一般に第2拍上昇は型としての勢力が弱いのではないか。)

7. 私自身の電話における経験を例としてあげよう。

……¹オ¹ー¹イ¹シと申します (オーイさんですか) ¹オ¹ー¹イ¹シです (は? オー
イさんですか) いえ、¹オ¹ー¹イ¹シです

私の名前はオ¹ーイ²ンである。しかし、オ¹ーイ²ン³、オ¹ーイ²ン³などの形を取らざるをえなかった。

*バ¹ーチ²ーは変だよ、バ¹ーチ²ー³だね
シダ¹レ²ヤナギか、シダ¹レ²ヤナギか

なども似た例である。つまり、意味との対応をはなれた、形としてだけの語音の一部分の強調、このようなものもプロミネンスに入れるとすれば、それによるアクセントの型の破壊の例はさらに考えられよう。これはことばの音調の秩序にいっさいこだわらないものである。形としてだけ意識されて、いわば語音がすでに語音でない単なる音となっているような場合だから、こういうことのあるのは当然ともいえる。

8. 以上、プロミネンスの音調について、観察しえた範囲の吟味をしてきたが、まとめてみれば、プロミネンスの型にま²え高型とあ²と高型とがある、ま²え高型の中に早²あ²がりの型がある、あ²と高型の中にお²そ²あ²がりの型がある、なお音調の秩序からまったくはずれた、語音の一部分の強調の、いわば別種プロミネンスがある、というところまで到達したわけである。

そうして、アクセントとプロミネンスとの関連については、助詞・助動詞以外の語については、プロミネンスによってアクセントの型が破壊されるのは特殊な場合だといっていい。助詞・助動詞のような、本来アクセントの型の勢力の弱い語は、プロミネンスによってアクセントの型が破壊されることがしばしばある。一般の語については、あ²と高型の場合、デ¹ン²ネツ²キなどのような語末から2拍目にアクセント核のある語にまた、ある場合あ²と高型の平板型にアクセントの型の破壊が見られるが、そのほかには、アクセントの型が（核が失われるという意味で）破壊されるようなことはまずなさそうである。しかしそれとは別に、二山の型や第1、2拍間の高低変化（第2拍上昇）の消失など注目すべき音調の変形があるので、ことにあ²と高型を認める以上、プロミネンスの音調はアクセントの型をきわだたせるものとだけいうわけにはいかないのである。なお、形としてだけの語音を動かしている、いわば別種プロミネンスにおけるアクセントの型の破壊は、切り離して考えていい。

2 高さ・強さ・長さ

1. プロミネンスでは文中の重要部分が強く発音される、それによって音調が影響される、つまり、強弱変化が高低変化を支配する、と一般に言われてきた。あるいは、強弱・高低の対比を顕著にすると説明されてきた。これに対して、プロミネンスは声の上昇によって示されるとして、高低変化をプロミネンスの手段と見る立場（川上泰「東京語の卓立強調の音調」）や、プロミネンスには強さ・高さとともに長さが加わる、しかも日本語のプロミネンスにおいては、長さが最も主要な要素だと見る立場（大西雅雄「日本語のプロミネンス」音声学会会報、第94号）もある。私がこの稿で述べてきたところは、もっぱら高低変化への着目によるものだったが、ここであらためてこの問題を取りあげて、実地について少し吟味を加えてみよう。

2. プロミネンスの高さの実現されている部分には、同時に強さが加えられていると感じられることが多い。ことに早あがりの場合など、概して強めの感じも著しい。しかし、特別な強さが感じられず、高さだけの感じられる場合も少なくない。

特に二山の²あと高型で特高にならない場合のプロミネンスには、特別の強さが加わっていないことが多いと観察される。

3. まれに、強さの変化の方が高さの変化よりも印象的である場合がある。

ソ¹退屈ぶりを認められて

しかしこの場合も、少し注意深く観察すれば、特別の強さと同時に特別の高さが加わっていることをとらえることができる。そしてソ¹の二拍の間には、実は高さの差がほとんどなくなっている。むしろ普通のプロミネンスの音調ソ¹と比べてみるとこれは著しい。（付図6）すなわち、早²あがりともとえられる。これと早²あがりとは裏表だともいえる。

4. 「場所を言っているらしい。」「すいかの皮ではありません。」を、「場所」「すいか」にそれぞれ強調点を置いて言うと、普通には、

*バ¹シ¹ョオイ¹ッテイルラジ¹イ *ス¹イカノカワ¹デワアリマセン

となる。すなわち、プロミネンスの高さは、強調しようとする語の上だけにあ

らわれるのではなく、そのあとまで持続される。準アクセント現象の実現の姿に沿って持続されるのである。とはいえ、実際に同じ高さが持続されるのではなく、高さは漸衰していく(付図7)ののだが、型としては、上記のように持続されると見ていい。「すいかの皮」に強調点が置かれる時は、このような高さの漸衰は見られない。)これに対して、高さと同時に加えられる強さの方は、強調される語だけ、それも語頭だけに加えられるものようである。この点、強さの加えられ方の方が合理的であるともいえる。

5. しかし、高低の聴覚的把握は比較的容易だが、強弱の把握は容易でない。拍を単位として高低変化をとらえるような流儀に強弱変化をとらえることは、まず不可能である。また、音声学的強さと物理学的強さとの間にはかなり大きなずれがあるものであって、音声学的強さの客観的把握はきわめて困難である。しかも一方、上述のように、プロミネンスにはつねに著しい高低変化が実現されるとすれば、プロミネンスは高低変化すなわち音調によってとらえていくことが適当であり、また、それで足りると考えていいであろう。たとえ強さが主導契機で高さが随伴するものであったとしてもである。ことに、特別の強さの変化がなく、高さの変化だけによる場合が少なくないということも重視されなければならない。言語学的把握のためには特に、高さによることが唯一の可能かつ有効な方法だと考えられる。もちろん、ことばの使い手としての主体的立場では、心理的生理的把握のかぎりで強さも生かされてはたらいっているものには違いないが、これをすべて言語学的にとらえて秩序づけるものではない。

6. プロミネンスにおいて長さの要素が加わるということについては、次のような例を見る。

フーグノヨ トよんで イシダヒヒデサンでございました 夕方咲く

 シロイ オキナ花の名まえ (~~~~の部分^{*}は発音が緩。へは間を示す)

このように、高さの特別な変化に添えて長さが実現されたり、また、もっぱら長さが卓立強調を成りたたせていると見られる場合もある。これをプロミネンスとよぶとすれば、長さが日本語のプロミネンスにおいて無視することのできない要素であるということについては問題はない。しかし、長さが、少なくとも聴覚的に把握されるかぎりでは加わず、高さ・強さだけでプロミネンスの

成立する場合も非常に多いという観察は誤っていないだろう。要するに、日本語のプロミネンスとしては、高さの変化、強さの変化、長さの変化があり、それらがしばしば複合的に実現されるのである。

3 強調される概念と音調の形

1. 28人のうちでコ¹ノ²オ³ンガクノオ⁴ト⁵コ⁶ニあたります ジ⁷ブンノウチ⁸エ⁹オ¹⁰
 チタ¹¹ア¹²ワわからない ナ¹³ナ¹⁴バンノ¹⁵マ¹⁶エ¹⁷デお待ちください *ジ¹⁸ブンノ
 リ¹⁹エキ²⁰バ²¹カリ考えている

では、強調されている概念は、それぞれ〔この音楽の男〕〔自分のうちへ落ちたの〕〔7番の前で〕〔自分の利益ばかり〕であると考えることができる。便宜的な言い方をすれば、「この音楽の男」「自分のうちへ落ちたの」「7番の前で」「自分の利益ばかり」という各語連結が強調されているといえる。また、

*……コ¹ノ²オ³ンガクノオ⁴ト⁵コ⁶ニ…… *ジ⁷ブンノウチ⁸エ⁹オ¹⁰チタノ¹¹ア¹²……

の形を取ると、強調されるのは「この音楽の男に」「自分のうちへ落ちたのは」となる。こういう単純な構造観は不十分であるかもしれない。ただ要は、ここで、助詞にプロミネンスの高さが置かれた場合、強調されるのはその助詞だけでなく、その助詞の付属する語あるいは語連結まで包んだものになるだろうということである。

これと違って、単独の助詞自体が強調される場合もある。たとえば、

ガ¹ッコー²ノ³討論会? いや、ガ⁴ッコー⁵デ⁶やったんです
 などの場合のように。

しかし、助詞の本来の性質から、上記のような語連結ぐるみの強調の場合が普通である。このことは、助動詞についても同様であろう。つまり、普通の場合には、助詞・助動詞へのプロミネンスということだけでなく、助詞・助動詞に高さのある場合も、その付属する語ないし語連結まで包んだものにプロミネンスが置かれていると考えるべきことになる。

2. コ¹ノ²オ³ンガクノオ⁴ト⁵コ⁶ニ当ります

という形をとる場合は、強調されるものは「男」である。コ¹ノ²オ³ンガクノオ⁴ト⁵コ⁶ニ……の場合との相違が注目される。

ここから、次のように考えられる。あと高型において、その語を修飾する語あるいは語連結がある場合、プロミネンスはそれまで含んだものに置かれていると見ていい場合が多い。(ただし、その範囲はおそらく修飾関係の性格や形式構造によって規定されるところがあるはずで、追究の必要がある。)また高型においては、プロミネンスはその語に置かれている。

だから、

シ[タ]ノオ[ト]ー[ト]ワおとなしい

は、「下の弟」を強調する表現として成立するが、

*シ[タ]ノオ[ト]ー[ト]ワおとなしい

は、「下の」と「弟」とが概念の重複をなしている表現における「弟」の強調としか見られない。

*サ[ト]ークンノオ[ト]ー[ト]ワおとなしい

*サ[ト]ークンノオ[ト]ー[ト]ワおとなしい

では、まえ高型の方は「弟」の強調、あと高型の方は「佐藤君の弟」の強調、という相違は明瞭である。

*ワ[タシノ]ア[ワ]おとなしい

は、まえ高型で「兄」を強調している。これに対する「私の兄」を強調するあと高型は、

*ワ[タシノ]ア[ワ]おとなしい

となる。すなわち、あと高型はこの場合、語「兄」の上には実現されず、文節「兄は」の上に実現されている。これは2拍の語「兄」にあと高型を実現させる方法がないからである。アクセントの型は違っても、「姉」「孫」等についても同様である。あと高型は、ア[ネ]ワ、マ[ゴ]ワのように文節の上に実現されるだろう。(まえ高型では、ア[ネ]ワ、マ[ゴ]ワとなる。)

つまり、語の上にあと高型の実現不可能の場合には、後続する付属語を高める表現におきかえられると見られる。

*ナ[ナ]バンノ[マ]エデ……—ナ[ナ]バンノ[マ]エデ…… *ジ[ブンノウチ]

エ[オ]チタノワ……—ジ[ブンノウチ]エ[オ]チタ[ア]ワ (*オ[チタノ]ワ) ……

*ジ[ブンノ]リ[エ]キバカリ……—*ジ[ブンノ]リ[エ]キ[バ]カリ(*リ[エ]キバ[カリ],

*リ[エ]キバ[カ]リ) ……

のそれぞれの相違も解釈される。ただし、マエデは上記の見方で片づけられるが、オチタノワ、リエキバカリのような音調が普通には実現されないのは、2拍の語という限定をおかす。これについてはあとで取り上げる。

3. *コノオシガクノオトコニ…… *ナニバンノマエデ…… *ジブンノウ
チエオチタノワ…… *ジブンノリエキバカリ……

の形をとっても、強調されるのは「この音楽の男」「七番の前で」「自分のうちへ落ちたの」「自分の利益ばかり」である。コノオシガクノオトコニも、コノオシガクノオトコニも、強調するものは同じである。したがって、型としては、末部のあと高型の高さだけが必要で、頭部の高さはなくてかまわない。つまり強調部分の末部にあと高型の音調を配すれば足りるのである。

要するに、1箇にまとまった完全概念（妙なことばだが、助詞・助動詞などだけで表わすようないわば付属的概念に対して、自立語が中核となって表わす概念を、かりにこう名づける）の強調のためには、プロミネンスの高さは1個で足りることができる。それは原則として、まえ高型でもあと高型でもいい。しかし、その概念を表わすことばが別に2箇以上の完全概念を表わしうるような構造の語連結より成る場合は、その末部にあと高型の音調を置けばいいということになる。強調の度あいなどのニュアンスの相違はもちろんあるが、プロミネンスの基本的な型としては、以上のように考えられる。だから、

コンドノチューゴクトノボエキノダシゼツノケツカウケマスルチ
ョクセツノヒガイダケデモ（今度の中国との貿易の断絶の結果受けまする直接の被害だけでも）……

のように、演説などで力説するような場合、プロミネンスの高さが、極端には、置かれうるかぎりの場所に置かれるようなこともあるが、この例などでも、特に力説するのでなければ、……ヒガイダケデモと最後の一つだけ置いて強調は成り立つ。なおこれは、……ダケデモ、……ダケデモの形を取ることでもできる。助詞とあと高型との関係は、さらに検討を要する。

4. さきに、オチタノワ、リエキバカリのような音調が普通には実現されないのを不審としたが、これは、理由は付属語の側にあるようである。「東京大学は（も、に、の、が……）」は、

トキョーダイガク、～ガク、～ガク

のような形を取りうるが、「東京大学から(まで、ほど、には、へも……)」は、

ト「キョーダ」イガ「ク」〇〇, ~ガ「ク」〇〇

のような形を取りにくく、普通、

ト「キョーダ」イガク「ク」〇, ~ガク〇「ク」

のような形を取る。

つまり、付属語が1拍の場合は、それに前接する自立語にあと高型の音調の高部が実現されるが、付属語が2拍以上の場合には高部は付属語の上に大体限定される。このようなことに関連しても、なお、吟味してみるべき問題がある。

4 強調とプロミネンス

1. プロミネンスとは何かということはたな上げにしている述べてきたが、この最初のテーマに問題がないわけでは決していない。

声による強調表現にプロミネンス (prominence) とインテンシティ (intensity) の2種があるとは、H. O. Coleman 以来考えられてきて、日本語にもその別があると認められている。もちろん、その典型的な場合については両者の別は明瞭だが、判別の困難なものも決して少なくない。両者が同時にはたらいっていると見られる場合もある。だが、何よりも、本稿でプロミネンスとしてあげてきたものの中に、その点で問題になるものはないか。

まえ高型については文句はなかろう。あと高型をあらためて吟味してみる。それについて気になることは、川上泰氏が、インテンシティに最後の拍あるいは最後から二つ目の拍を高める型のあることを指摘しておられる(「強調の種類」言語研究, 第31号)ことである。本稿でプロミネンスのあと高型としたものは、形としてはまさにこれである。しかし、それとこれとは実質は別である。やはり卓立、文中の特に注意の注がれている主要語に加えられた強調の発音法だと見るほかはない。

ミ「ナサンガタニ」ワよくわかっておる, ニ「ホ」ンキョーサントー「モよくわかって
いる, しかし「カ」レ「ラ」ワわからない

の中には、まえ高型・あと高型がともに用いられているが、それぞれプロミネンスの音調だと見られよう。

では、まえ高型とあと高型とは、同じくプロミネンスの音調として、どう相違するのだろうか。まえ高型は、その語の表わす概念を強く指示しようという意識にリードされる発音法の型、あと高型は、特に語がはっきりと聞きとられることを目的とする発音法の型と言えないだろうか。すなわち、まえ高型では社会的慣習としての音調の型のままに語が強く提出される、あと高型では、声の勢力の衰弱していく語の末部を特に高めて語音をはっきりさせる、すなわち持続の効果をうむものだ、と解釈されないだろうか。

前述したように、あと高型に、先行部まで包括して強調するはたらきが認められるのも、この持続的な形によるものとも考えられる。これに反して、まえ高型では、先行部との間に断絶が生じると見ることができるのである。

また、確認的、念押し等の効果が感じられるのもあと高型の特色となるが、これが文末に用いられるとき、イントネーションの一つの注目すべき型としてもとえられる。

*ソ^レワ^ロワ^タシ^ノ セ^ンメ^ンキ^ノ

2. 声を高めたり、強めたりすることによる表現は、プロミネンス・インテンシティという強調表現に限られない。たとえば、イントネーションはもちろん強調表現だとはいえない。(少なくとも、プロミネンス・インテンシティについて見られるほどの狭い強調表現とは、全体としてのイントネーションの性格は区別される。)しかし、上にも触れたように、イントネーションとプロミネンスとの関係には整理を要するものがある。とりわけ文末部に当る際は、プロミネンスの音調がイントネーションの体系の中にどう織りこまれるか、とにかく大事な要素となるだろう。また、句末のイントネーションや文頭のイントネーションというものを考えるとすると、プロミネンスのあと高型やおそあがりがある中でどういう位置を占めるか、整理してみなければならない。その辺には今は手がとどかない。

また、軽快な気分での活発な話し方にあらわれるもの(金田一春彦氏の「心理的反射の事情といわれるもの」——「コトバの旋律」国語学、第5輯)やそれを装った話し方、たとえば接客対話などにあらわれるものなどは、高低変化の著しい音調を見せる(ただし、これにはあと高型はあらわれない。)が、これも原理的に、

ここでいう強調表現ではない。

3. 何を強調するか、強調対象によってプロミネンスを分けてみることもできるであろう。

- A 国会討論会じゃなくてガイトーロクオンでしょう カレラワわからない 7番のまえデお待ちください
- B 学校ノ討論会? いや、学校デやったんです *ビールガいいのかい、ビールモいいのかい
- C 机の上ニ置くんじゃなくて、机の上ニ置くんたら
- D シダレヤナギか、シダレヤナギか

Aは普通一般のプロミネンスで、強調対象は文中の主要語。「7番のまえで」の場合は、助詞「で」の受けている「7番のまえ」まで包みこんだものが主要語に当る。Bは単独の付属語の強調。助詞自身が強調されている特殊な場合。Cは概念から離れた語形だけとしての語の強調。Dは形だけとしての語音の一部分の強調。これはすでに語音が語音でない単なる音となっているというような場合だから別種プロミネンスだ、と先に言った。

あるプロミネンスがAのものかBのものか、BのものかCのものかなどは、もちろん、その部分だけ取り出して見たのではわからない。前後の関連の上ではっきりする。たとえば、

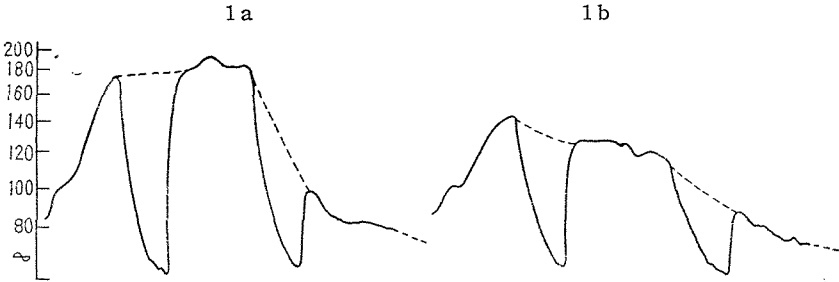
- a. *妻は食えないじゃない、ムギサニ食えないというところだ
- b. *米どころかムギサニ食えない

aはBに属し、bはAに属する。

以上、副題したとおりの覚え書で、従来のプロミネンス説を足場として、一、二の確かめと課題の指摘をなしたかにとどまる。ただ、話しことば(音声言語)の上で音調が文法的機能にもあずかるところが大きいとの見通しから、イントネーションなどとともに、いわゆるプロミネンスが注目されるべきだと考えたのであるが、その辺の追究はいっさい今後に残されている。

(付図) 国立国語研究所のピッチレコーダー (ペン書きオッシログラフ装置)
による高低変化の記録図

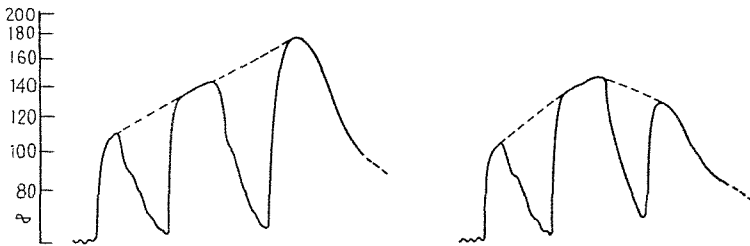
- (1) 発音者は筆者。拾った例については、できるかぎり忠実にその音調を再現するように発音し、作った例については、東京語の音調を実現するように発音したつもりである。
- (2) 記録紙の回転速度は1秒間6cm。
- (3) 無声音の谷を点線でつないで、全体の起状の姿を大まかにとらえてみた。



ガ イ トー ク オン... ガ イ トー ク オン...
(同じレベルで発音したもので、問題部分だけを切り取ったもの。)

2a

2b



オ トー フ ワ...

オ トー フ ワ...

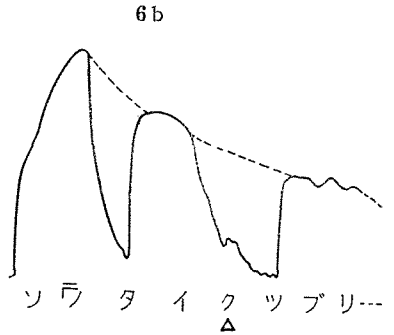
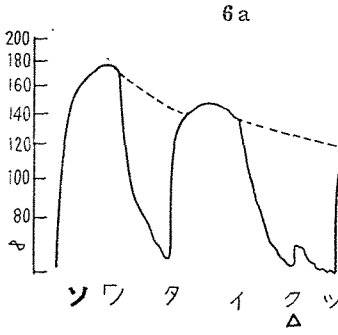
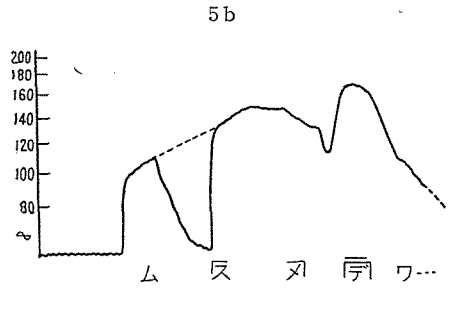
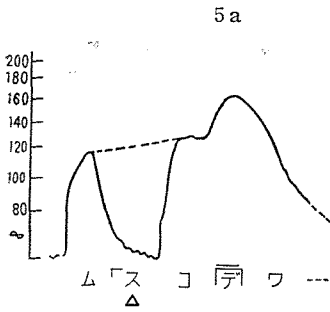
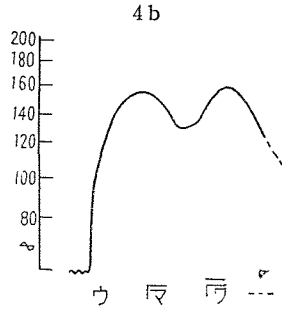
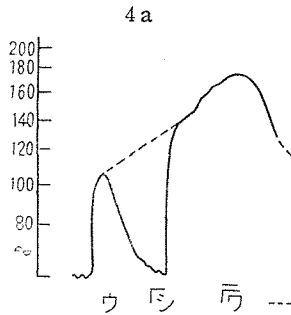
3a

3b



ガ レー ラ ワ...

ガ レー ラ ワ...



7

